

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 144号

平成26年4月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

石館守三先生の文章より (6)

(「石館守三先生金曜会語録」より (2))

右顧左眄せずに進め

キリストを信じるものを非科学的といって笑う。しかしそういう人間も何かの「宗教」をもっている。我々の宗教は実在をみつめる哲学とその原理に従って行くという信念を持っている。その原理への服従により最後の審判がなされる。私も又一生の中にその審判がくると思う。私は今恵まれている。〔阪井徳太郎〕会長は人生の3分の2を神に捧げたのにすべてを奪われた。戦後十年の生活は悲惨だった。ヨブのごとく煙の中になお祈り続けたということ。最後まで信仰を捨てなかったこと、これが会長を英雄とするのである。試練にあい、希望を断ち切られて始めて信仰が判断されるのである。信仰をもって社会にでても我々は揺すぶられるだろう。他の人間につ

いてはいろいろな生き方があると考えるよくだろう。だが自分については「聖書」という真実をみつめていくことが必要。我々には真実なるものをもつという強みがある。この道を行って頂上に達せねばならない。諸君はおぼろげながら真実なるものを示されているのは実に幸福である。右顧左眄せずに進め。

(昭和 34 年 10 月 16 日 金曜会)

諸君の立場は荒野のキリスト

何人かの人々が近く同志会を出るわけですが、……諸君を送るに当って思うことは、仕事の成功不成功のみを問題にするのではないが、それにつけても毎日曜教会に行くべきである。与えられた仕事を力一杯最善を尽くしてなすべきであるが、それが人生にいかなる影響を与えるべきかを考えるべきである。人生何が根本問題であるかをもう一度考えるべきである。それについても聖書にあるごとくキリストはスタートにおいて荒野で試練を受けられた。諸君の立場は荒野のキリストに比べられるのではないかと思う。

人はパンのみに生きるのではない。神の言葉に追って生きるのである。これが第1の試練である。第2は悪魔はキリストに言った。「汝が神の子ならこの崖から飛び降りよ」これに比べられるのはクリスチャンに対する世の人々の軽蔑のことばである。これに対する断固たる信仰を持っているか。第3はキリストに悪魔が「われに仕えるならこの世のすべての栄華を与えよう」と言った。これは我々が何に仕えるか、これは我々に与えられた大きな試練である。この世で幸福を追うことよりも神の言葉に従うことが我々の取るべき道ではないか。

(昭和35年1月29日 金曜会)

卒業して同志会を出ていく人たちに

本年も同志会の兄弟を新たに外会員として送り出すことになった。毎年のことながら感慨ひとしおである。世話する私達として至らぬ点多し。50余年の同志会の光を守っていただいたことにも感謝に堪えない。皆さんが入って来られたことは、ゆくりもなく入って来られた。また縁故によらずキリストによることはいうまでもない。2年は短い。しかし人生における目的の一端を体験しえたことは皆さんにとって喜ばしいことである。

老婆心ながら2, 3助言する。戦後復興がめざましい。しかし要求されるのはキリストの福音である。この同志会で皆さんが学んだことを人生でいかに生かすかが皆さんの人生の勝敗を決める。社会は神を知らざる社会である。同志会は平和であった。皆さんの生きていく社会は困難多し。異なった主義をもつ社会に入って皆さんが自分の節操を守っていけるかどうか。人は二人の主人に仕えることはできない。富に仕え自分の利益に仕えるか、幸いにして諸君は同志会において何に使えるべきかを学んだ。これを生かして頂きたい。

しかしそれだけでは不十分。ユダヤ人が独善に陥った如く他の主義に使える人々を軽蔑してはいけない。共に苦しむともがらである

ことを忘れてはならない。どうかすると独善に陥り苦悩から逃げやすい。彼等も又神によって求められる兄弟であることを忘れてはならない。どうかすると独善に陥り苦悩から逃げ易い。彼等も又神によって求められる兄弟であることを考えて自己の義務を果たして頂きたい。キリストは世を支配するために来られたのではない。自らの死によって世を救うためであった。どうか神の国をあらわすものとして人生を成功をもって終って頂きたい。卒業しても同志会を訪ねて頂きたい。

(昭和 35 年 3 月 11 日 予餞会)

[注 予餞会 旅立ちや卒業の前に行う送別の会。「餞」ははなむけの意。]

新入生を歓迎する

毎年ながら 9 人の新しい生命を歓迎する。同志会は 59 年前、阪井先生によってできた。先生は東大の学生にキリスト教の生命を伝えたい、これなくしては将来の日本はないと考えられて出来た。会は何らの社会、人間的関係なく教派の別なく、人間を作るために出来た。ここを出た人が手紙をよこして、同志会に入ったことが人生に大きな意味をもつという。出てから特に感ずるといふ。諸君も今は分からないだろうが、将来に大きな意味をもつことを後で悟るだろう。

自分の体験から 2, 3 を参考に言う。私は同志会で共同生活を通して先輩に接し、周囲の愛で生きていることを知った。阪井先生、諸先輩の愛から隣人への愛の義務を感じた。また 3 年在会したが、いろいろの faculty [学部] の人と会った。もし下宿にいたら知らなかったろう。友人が色々の考え方、長所をもっていることを知った。もし下宿なら人前で話したり先生になったり出来なかっただろう。同志会で訓練したことは大きい。また自己をおさえて共同生活をすることを知る。下宿の方が勉強しやすいと考えることもあるだろう。金曜会等自分の希望で逃れようとする。しかし出るべきだと考えて

貴重な時間をさいて出るとこれは緊張する。日曜も同じ。目前の利を離れてまことの精神を得ようとすることは訓練さるべきだ。金、日曜を捧げ得ぬ人は他の時間もうまく利用できない。忍耐してやった方がずっとためになることが後で分る。共同生活での自己犠牲の訓練だ。また集団によって訓練される。人の美点を見て反省し励まされ向上する。

同志会は不便なところもあるがこれらを考えてよく利用して下さい。会の中にあって不便を克服してやった方が自分のためになる。日曜も出ず成績がよくともマイナスが多いだらう。逆の時よきものを得るだらう。同志会の利用は諸君自身にある。個人的には自由、全ては一致、愛をもってやってほしい。よく考えてくれ。これが創立者の意思だ。

(昭和 36 年 4 月 21 日 金曜会 署名式)

退官記念感謝会におけるあいさつ

今日の金曜会を私のための会として下さいましたことを感謝する。実感を述べてみたい。

第1、自らを省みず理事長をしていることは自らどうしてもやりたいことだからである。これは同志会に迷い込んだことから始まったことである。祈る道をそれまで知らなかったが、人として最善の道があるならば教えてほしいという気持で同志会に入った。同志会に入って人生の左右をわかれる時神を知らされ、人生の何ものたるかを知らされたことが私の同志会で得た尊い恩恵である。この恩恵の一端でも返したい気持ちでやっているのである。

第2、大学教授への道をとることになったこと。（その当時は夢にも考えなかった。）良い先生についたため学問に対しての道を教えられた。ところが学問の道は science に一生を捧げるということは何の意義があるかという疑問が生じた。物質文化の発展にのみ自分を捧げたことになるとすればさみしい。人間、欲望に奉仕するのみではいやだ。世界に奉仕する祈りをもってすべきだ。その「科学を支えるべき祈り」がほしいという気持とこのことを若い人に少しでも伝えるために同志会の仕事をさせて頂いている。同志会を通してそ

の使命を果したい。

第3、私は田舎の薬屋に生まれ、高校時代の成績も悪く、決してこのような現在の地位を約束されるような者ではなかったにもかかわらずこうしていただけるのは、やはりこれは何かが私を支え、こうさせて下さったのだと思う。私は自分の才能に頼らなかった。奉仕の精神で能力以上のものが与えられたのだ。これは私にとって驚異である。このことは強調し過ぎると誤解がある。自分の名誉のために利己的にやれば必ず挫折する。私は私の研究のために多くの協力者を必要とした。その人達が皆一致して世の中の病人のためになれかしという奉仕の気持ちでやっていたため、困難があっても乗り越えて行けた。この精神を同志会で学んだものだ。このことを本当に感謝している。

第4、信仰はそれをただ信仰として存在させては意味はない。実行すべきである。神の言葉をそのまま信じて実行する。神の言葉に従うか、自分の欲望に従うか。前者！この判断はこの世の法則に反する。多くの人は何かそこに利があって行為する。「報いをのぞまで……しからば汝必ず……」これが我々の目標である。私自身も自分の研究成果によって得るところのものを薬屋に要求しない。研究室

に利益があればそれを戻して下さいというだけで得るものを得ている。

戦災によって家は残った。まわりは皆燃えてしまった。これはどういう偶然か、私は知らない。こうして大きな屋敷を残してもらえたため2階を教会として用いることとした。これも何かのお役に立ちたいという簡単な気持だった。しかし私は思いにまさるむくいを得た。私の家族が皆クリスチャンとなったのである。これは私は願ったわけではない。しかしその教会を通して家族は無条件に信仰の生活に進んでくれている。これは何と感謝していいか分からない。

大学を去るに及びキリストにたよることによりこの一粒の「キリストに従いたいという気持」で生きたい。「われは道なり、真理なり、命なり」を知るだけでなく、実行する事を得るならばよろこびだ。

(昭和36年5月12日 金曜会、石館先生退官記念感謝会)